

硫黄島遺骨収集に

参加して

杉田 明傑 陸自63

1 硫黄島への移動

平成30年1月下旬から2月中旬まで、硫黄島における平成29年度第4次戦没者遺骨収集派遣団に参加した。

硫黄島における遺骨の収集は昭和27年から始まったが、本格化は昭和43年の小笠原諸島の返還以降であり、さらには国の義務として法制化されたのは一昨年、戦没者遺骨収集推進法が成立してからである。これを受けて所管の厚生労働省は遺骨収集推進協会を設立してこれに業務を一任している。

この協会は防衛省から所要の支援を受け、関係団体から毎回約30名の人員を募って現場作業を行っている。関係団体には硫黄島協会、日本遺族会、硫黄島旧島民の会、日本青年遺骨収集団、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会(全慰協)などがある。

因みに私は全慰協に協力する借債社からの口利きで参加させていただいた。私事ながら自衛隊現役時代、硫黄島を訪れる機会があり、栗林兵団長の「生きて再び祖国の土を踏むことなきものと覚悟せよ」との訓示を聞いた兵

士の心中を思い、せめて遺骨を祖国に迎える手伝いができたらと再来島の機会を願っていた。

参加者の中には、栗林大将の兄の孫(73歳)や大学生3名のほか、自衛隊OBも4名が参加していた。また、不発弾等の処理のため陸上自衛隊第6後方支援連隊から隊員4名が同行していた。

1月30日、推進協会からの団長と補佐者3名を中心に人間基地近くのホテルで結団式があり、翌日人間基地を航空自衛隊輸送機C2で発った。因みにC2は20t積載して航続距離はC1の5倍近い7千6百kmとのことであった。美保から飛来しわれわれを硫黄島に輸送することが初任務とのことであり、取材のマスコミも集まっていた。

2時間余りで到着した硫黄島は、東京から1千280km、台湾北部までと同じ距離にあり、亜熱帯性の気候で年平均気温は24度である。長径8km、最大幅が4km、面積は22・5km²で品川区とほぼ同じである。現在、海空自衛隊員約300名が常駐するほか、インフラ整備のためゼネコン関係者約100名が居住している。

宿舎は米艦載機の夜間離発着訓練のための兵員が宿営する施設であり、食事は鹿島建設と契約して喫食することになっている。

2 収集作業

到着翌日には、天山の慰霊碑前で来島報告式があり、英霊に対して活動の加護と安全を祈願した。

そしていよいよ遺骨の収集作業が始まった。厚生労働省はかねてから島をメッシュ状に区切って収集を進めており、今回は北部の兵団司令部があった壕の近くの地下壕入り口が活動の対象となった。重機で壕を壊して土砂を集め、それを篩にかけて遺骨を採し出すのが主たる作業である。重機作業中、遺骨の気配があれば、手作業で考古学者のように慎重に掘り出していく。別のグループは滑走路近くの千田壕と言われる壕内を搜索した。ここは特に高温のため、送風機によって外気を送風しながらの作業となった。

こうした作業を連日続けて収容できた遺骨は16柱。他に鉄カブトや水筒、三八式歩兵銃の金属部分、銃剣、拳銃、軍刀などが収容された。中には着剣した状態の銃も見つかり、突撃の準備中か突撃中であつたかと思うと、今は遺骨となつた持ち主の無念が偲ばれた。

また多くの小銃弾や手榴弾のほか、米軍のコルト45拳銃も出てきた。この赤錆びた拳銃について私は日本軍が兵から鹵獲して使用したものと推察したが、帰宅後、米国映画「硫黄島から

で在米中、パーティの席で記念品として銃把が装飾されたコルト45が贈呈される場面があり、さらに後年兵団長として硫黄島で指揮を執っている場面では、この拳銃を腰にさげているではないか。映画の真偽はわからないが今回発見したコルト45が栗林大将の持ち物であつた可能性も否定できず、もしそうであれば大将が最後を迎えた場所や遺骨の特定につながるかもしれない。

あとはDNA鑑定の可能性に期待することになる。なおこの拳銃は薬室に抽出困難な実包があつたので、他の弾薬類とともに現地海自に移管されたようだ。また認識票らしいものも2枚発見された。残念ながらいずれも刻印の判読が不能であつた。これら付随して発掘されたものの中には、展示資料などとして価値あるものも見受けられたが、遺骨の識別につながるものはない。作業後一括して現場付近に重機で埋め戻されたので、2度と陽の目を見ることはないであろう。遺骨収集団体の対応としては当然の処置である。

こうして1日の休日を除き、2週間に収容できた遺骨16柱は、近年にない多数とのことであつた。因みに平成29年度は4回の硫黄島遺骨収集が計画されていた。1回目と3回目は現地の水不足から自衛隊が受け入れず、2回目は実行できたが1柱の収容に留まった。

年度途中の収容遺骨は天山慰霊碑近くの仮安置所に保管し年度末まとめて帰還することになっている。従つて今回は合計17柱の遺骨を奉持して帰ることとなった。帰還前日、天山の慰霊碑前で、現地追悼式が行われた。

3 遺骨の帰還

翌2月15日、海空自衛隊の榮譽礼と見送りを受けて硫黄島を輸送機C1で飛び立った。なお多くの遺骨を残したままの離陸に後ろ髪をひかれる思いであった。2時間余りの飛行の後73年振りに故国に帰還した英霊の遺骨は、入間基地においても儀じょう隊や隊員の手厚い出迎えと見送りを受けた。後に同行の学生は、出征するときは賑やかに見送られたらうから、帰国の時も丁寧に出迎えることは英霊への礼儀だと思つて記していて感心させられた。

都内に1泊の後、千鳥ヶ淵での引き渡し式に臨んだ。17名の団員に奉持された遺骨は午前10時、厚労省副大臣はじめ大勢の国会議員や遺族等が参列する中、厚労省担当職員に1柱ごと手渡された。追悼の辞や献花があった後、解団式が行われすべての任務は終了した。

因みにこれらの遺骨は1年間厚労省の仮安置所に安置されて遺族の問い合わせに備え、その後引き取りのない遺骨は千鳥ヶ淵墓苑に納められ、生きて

は踏めなかつた祖国の地で永遠の眠りにつくことになる。

4 まとめ

収集作業を終えて率直に思うことは、作業の進度があまりにも遅いということである。2万名という戦死者のうち未だ1万を越す英霊が帰還を待っている。安倍総理大臣は最後の1柱まで収容すると述べたというが、今の速度では100年経つてもできない。

硫黄島は他の戦場と違って、地熱の高い地下壕付近が主たる収集場所であること、米軍施政下で壕は埋められ、遺骨に配慮することなく構造物が建てられてきたこと、経年変化、受け入れ態勢など、遺骨収集の支障は多々あるが英知を絞つて効率を上げることが切に望まれる。

